哲學研究　第三十五號　第四卷第二冊

經驗內容の種々なる連續

西田幾多郎

一

或飽和度の赤と之れと飽和度に於て若干の距離を有する同性質の赤との間に、飽和度に於て無限に異なれる赤の系列を入れて考へて見る。此の如き系列に於て一つの要素から他の要素への推移が極めて漸次的なる時、即ち任意の一要素と次の要素との差異が無限に小なる時、その極限に於て此系列は一つの連續となると考へられるのである。數學的に云へば、此系列の何の部分に於ても無限に分つことができるのみならず、即ち überalldicht であるのみならず、すべての要素が此推移の系列の極限點となるとができ、且つ此推移のすべての系列の極限點が漏なく此中に含まれ

る時、卽ち insichdicht であつて且つ abgeschlosen である時、此系列は完全なる一つの連續となるのである、卽ちCantorの所謂 The ordinal type θ of the linear continuum X となるのである(G. Cantor, Beiträge zur Begründung der transfiniten Mengenlehre. § 11.)。斯く有理數に比すべき分離的要素の系列から實數の系列に比すべき連續的系列に達するはそこに一種の飛躍があると考へねばならぬ、卽ち立場の變更がなければならぬ。極限點とは我々が分割によつて達することのできない點である。連續を理解するにはデデキントの Schnitt の考の如く全體から出立せねばならぬのである。

ライプニッツが „chacune de ces substance contient dans sa nature legem continuationis seriei suarum operationum" と云つた樣に、實在は連續的なものでなければならぬ、それ自身の中に連續を有せない分離的要素の集合は實在とは云はれない。或赤から他の赤までの間に考へられた赤の系列が極限點の集合として一連續體と考へられた時、全體はもはや物體的統一ではなくして精神的統一となる、卽ちそれ自身に於て獨立なる一つの作用となるのである。心理學者は精神現象の要素として分離的なる感覺を考へるかも知れぬが、分離的と考へられる感覺は考へられた感覺であつて、生きた感覺其物ではない。單に區別せられた赤とか青とかいふものは之を精神現象的と

して考へることもできれば、物體現象的として考へることもできる。此等の性質が何等の外的統一の假定をからずして夫自身に於て直に結合すると考へられた時、我々は之を精神現象と考へるのである。精神現象とは此等の性質の內面的變化である、働く者なき働きである、精神現象の內面性直接性は此處にあるのである。勿論連續的なるものが直に精神作用と考へることができないかも知れない。例へば物力と雖も、獨立なる一つの作用として考へられるには、夫自身に於て連續的なるものと考へられねばならぬ。精神作用とはそれ自身に於て連續的なるのみならず、自發自展的なものでなければならぬ、卽ち己自身の中に變化の法則を含むものでなければならぬ、ライプニッツの語を藉りて云へば lex continuationis seriei suarum operationum et tout ce qui luy est arrivé et arrivera を含むものでなければならぬ。己自身の中に變化を含むといふことは己自身の中に目的を含むといふことでなければならぬ、卽ち目的が自己の中に働いて居ると云ふことでなければならぬ。或は、目的を己自身の中に含み目的が自己の中に働くといふのは單に精神現象にのみでない、生物現象に於ても爾云ひ得るかも知らぬが、精神現象に於ては目的自身が意識されて居るのである、斯くして始めて眞に目的が內面的であり、目的自身が働くと云ふことができるのである。

物體は外から働くものがなければ、何處までも自己の狀態維持するに過ぎない、從つて物力の結合は單に偶然的と考へられる。然るに生物現象に於ては種々の力の結合が目的に依ると考へられる、卽ち一つの目的が働いて居ると考へられる。併し尙物體現象の範圍を脫せざる生物現象に於ては、その目的が現象其物の成立に何處までも必然と考へられない、生命の機械論的說明の企てられるのは之に依るのである。カントの「第三批評」の語を以て云へは、自然の合目的性は單に regulative Grundsätze であつて constitutive Grundsätze ではない、唯精神現象に於ては目的は現象其物の成立條件となるのである、卽ち constitutive Grundsätze となるのである。目的の內在的に働かない卽ち統一が實在的でない精神現象はない。實驗心理學者といへども斯く考へるのである。

余は是に於て連續といふことに就いて深く考へて見なければならぬ。連續の成立するには繋がれるものと繋ぐものとがなければならぬ、卽ち連續の要素と連續の形式といふものがなければならぬ。後者を連續のアプリオリと呼ぶこともできるであらう。カントルは集合 Menge に geordnet (所謂 Ordinalzahl) と然らざるものとを區別して居るが、geordnete Menge には Ordnungstypus がなければならぬ、Ordnung は之

に依つて成立するのである。有限數に於ては Kardinalzahl と Ordinalzahl とは同樣に見てよいのであるが、無限數に於ては兩者は異なつたものとなつて來る。元來 Kardinalzahl と Ordinalzahl とは根本的に異なつた概念であらうが、無限數に至つて Ordnungstypus が獨立性を顯はし來るのである。Ordnungstypus 卽ち Idealzahl が特別なる取扱を要することに依つて、卽ちその獨立性を現じ來ることに依つて、集合の理想的要素が實在的となると考へることができる。Ordinalzahl の Operationen は理想的要素の關係を示すものである。我々が有限數から超限數の考へに進む時、既に所謂實在的なものから理想的なものから理想的なものに移ると考へることができる、卽ち一層高次的な實在に到ると考へることができる。有限數の系列は限定せられた個物の體系に相當し、如何に無限の系列に進むとも畢竟有限の範圍を超越することはできない、時空の上に限定せられた個物が如何に增加するも時空の形式を脫することができぬのと一般である。我々は極限數 Limeszahl に於て、時空によつて限定せられた所謂經驗的事實の世界を超越して、思惟の對象界に入らねばならぬ、極限數とはもはや知覺の對象ではなくして、唯思惟すべきものである、知覺すべきものは何處までも有限に過ぎない。我々の自己意識に就いて云へば反省せられた自己は有

限數的自己であつて、眞の自己は反省によつて達することのできない、却つて反省作用其物ともいふべき極限數的のものと考へることができる。有限數に於ては個々の要素が實在的と考へられるが、超限數に至ては個々の要素よりは其 Ordnungstypus が實在的となる、繋がれたものよりも繋ぐものが獨立的となつてくる、即ち作用其の物が獨立的となるのである。集合の何の點をも極限點を考へることのできると云ふこと即ち insichdicht とは右の如き理想的要素の連結と考へねばならぬ、即ちその要素の一々が作用であると考へねばならぬ。連續とは高次的なる實在の要素の體系である、連續に於てはデデキントの切斷の考へに於て明にせられた如く全體から出立せねばならぬ、ライプニッツの所謂 imo extensione prius である、一々の要素は獨立の要素ではなくして切斷として全體の意味を含んで居るのである、Ordnungstypus の意味を含んで居るのである、即ち一々が全體の象徵となるのである。而して眞に斯く全體が部分の中にあり理想が直に現實となると云ふには、全體が內から自己實現的に働くと考へねばならぬ、此の如きものにしてはじめて一々の要素が全體の意味を含むものと考へることができるのである。一つの系列に於て、その要素を統一する Ordnungstypus 即ち形式が物體現象に於ける空間的關係の如く單に外的なる時、それ

は要素に對して何等の働きも爲すことはできぬ、卽ち全體が働くといふことはできぬ、此故に內面的關係として物力といふ如きものが考へられるのである。カントルが連續卽ち Ordnungstypus θ に於ては單に insichdicht であるのみならず、集合に於けるすべての Fundamentalreihe の極限點が其中に含まれて居らねばならぬ卽ち abgeschlossen でなければならぬと云ふのは、Ordnungstypus 其物が他の力をからず、それ自身にて獨立的に働くと云ふことでなければならぬ。一つの集合の系列の極限點が盡く集合の中に含まれて居ないと云ふことはその集合の統一が十分ではないといふことを意味して居る、自己の作用が他に因つて破られて居るといふことを意味して居る。完全なる連續に於ては全體が一つの獨立なる、それ自身に於て十分なる無限の作用でなければならぬ、それ自身に於て全き一つの作用の內面的發展でなければならぬ。一つの系列が極限點をそれ自身の中に有つといふことは一つの體系がそれ自身の中に目的を有つといふことを意味して居る、自動的といふことを意味して居る。此意味に於て物力は嚴密なる意味に於て abgesclassen ではない、abgeschlossen なるものは有機的なものでなければならぬ。併し眞に abgeschossen と云ふべきものは意識統一による精神作用の外にないと云ひ得るであらう。他に依つて理解せ

られるものはそれ自身に於て獨立なるものとは云はれない、それ自身の中に目的を有するものとは云はれない。我々の經驗內容が物理的見方に於ての樣に經驗其物の內面的性質によらずして、その背後に不可知的xを考へることに依つて統一せられた時、その體系はそれ自身の中に目的を有つとは云はれない、即ちその經驗の系列は己自身の中に極限點を有つとは云はれない。例へば種々なる光の經驗がそれ自身に於て理解せられずしてその背後にエーテルといふ如き物理的連續を考へられた時、光の經驗はそれ自身に於て何等の實在性をも有せぬ、單に實在の符號となる。その背後に考へられた物理的實在も亦それ自身に於て內面的に理解せられず、相互の結合が外面的であり、偶然的であり、他の手段として考へ得る時、それ自身の中に目的を有するものとは云はれない。物理的連續は他に依つて與へられた連續、假定せられた連續であつて、それ自身に依つて立つ、それ自身によつて存在する連續ではない。普通に合目的的と考へられる有機的現象に於ても、要するに尙その目的は他に依つて考へられたもの、假定せられたものであるから、機械論者の考へ方の如く生命を全然機械的にも說明し得るのである。唯一から他に內面的必然を以て移り行くものに於てのみ眞に目的を己自身の中に有するといふことができる、即ち精神作用

に於てのみ眞に目的を己自身の中に有すると云ふことができるのである、精神作用のみ眞に閉ぢられた perfekte Menge である。

以上述べた所によつて、翻つて余の最初の問題を考へて見よう。或飽和度の赤と之と飽和度に於て若干の距離を有する同性質の赤との間に無限の系列を考へて見る。此系列が嚴密なる意味に於て連續的と考へられた時、我々は一層高次的なる實在に到達するのである、分離的なる感覺の系列といふ如きものから視覺作用といふ如き一つの獨立せる働きとなるのである。我々は一つの集合 Menge を濃度 Mächtigkeit を有する單なる集合として考へることもできれば、その要素が一種の順序 Ordnung を有するものとして之れを geordnete Menge と考へることもできる、即ち之を Kardinalzahl として見ることもできれば、之を Ordinalzahl として見ることもできる。何等の順序なき Kardinalzahl の世界は表象自體の世界である、單なる意味の世界である、此の如き表象自體を一つの順序によつて統一した時、Ordnungszahl の世界となる、Ordinalzahl となつても濃度を失ふのではない、依然 Kardinalzahl の性質をも備へて居る、唯之に Ordnungstypus の統一が入つて來るのである。斯くして成立する Oidinalzahl の世界は既に統一せる一つの體系として一種の獨立性を有し、一種の實在性を帶び

て來る。併し此の世界に於ては尙ほ要素が實在性を有つて居る、その Ordnungstypus は單に要素間の理想的關係に過ぎない、要素其物に對して外的である、恰かも我々の物體的世界に於て個々の原子が實在性を有するのと一般である。有限數に於ては Kardinalzahl と Ordinalzahl とを同樣に取扱ひ得ると云ふのは之に依るのである。之に反し濃度が無限なる時、卽ち超限數の場合は、Ordnungstypus が Kardinalzahl を離れてそれ自身の實在性を有つて來る、超限數に於ては Ordinalzahl は特別の取扱を受けねばならぬ、是に於て理想的なものが實在的となる、關係が實在となるのである。例へば赤の感覺的經驗がその飽和度に從つて配列せられた時、赤の飽和度といふことが此集合の Ordnungstypus と考ふべきであらう。此系列が無限と考へられた時、赤といふ Ordnungstypus が實在性を有つて來る。無限なる進行が可能であるといふことは Typus 其物が力を有することである、最終の要素がなくしていつまでも次の要素に移り行かねばならぬといふのは、要素はその背後に橫たはれる或物の表現であつて、背後の或物が實在であり要素はその限定に過ぎぬといふことである。是に於て赤といふ Typus は一つの力となり、一つの作用となる。無論此力はまだ物體的とも精神的ともいふことはできぬ、兎に角赤といふ現象が無限に現れ得ると云ふまでゝある。

此の如き力を表はすものがカントルの超限數とか極限數とかいふのである。集合の要素即ち概念の外延を作用の內容或は客觀的對象と考へ、集合の Typus 即ち概念の內包を作用其物或は主觀の性質と考へて見ると、前者がその極限に於て矛盾に陷つた時、後者が更に高次的なる作用の內容として、即ち一層高次的なる客觀的對象として現はれ來るのである。時間空間の考が Antinomie に陷るのは間接に此等のものが構成的形式たることを示すのである。連續といふのは右の如き極限數の系列である、力の系列である。カントルの überalldicht で且つ insichdicht であるといふ連續は、すべての點に於て能働的作用でなければならぬ。我々は是に於て單なる作用即ち考へられたる作用といふ如きものから、力の概念に到達することができる、Statik の力の概念から Dynamik の力の概念に到ることができる。赤の經驗の系列が何の部分にても無限に分つことができ、其何の點も極限點となることができるならば、此の赤の經驗は聯想心理學者の云ふ如き感覺の系列といふ如きものではなくして、獨立せる一つの力となる。併し此系列が眞に abgeschlossene Menge として完全なる連續となるには、嚴密なる意味に於て內面的統一を有たねばならぬ、即ち完全なる一つの內面的連續でなければならぬ。而してそれ自身の中に目的を有し、それ自身に依

つて成立するもの、卽ち精神的作用にしてはじめて此の如き連續と云ふことができるのである。Ordinolzahlを組織するOrdnungstypusを此體系のアプリオリと考ふるならば、Typusの連續とも考ふべき精神作用はアプリオリのアプリオリの上に立つアプリオリの結合と考へることができるであらう。此意味に於て精神現象の如何に受働的なるものでも物體現象とその次位を異にして居る。勿論物理學者はカントルの連續は解析の基礎として物力を表はすと考へるであらう。ニュートンのFluxionは連續的力の數學として起つたのである。併し物力といふのは與へられた經驗の說明として考へられた假定である、それ自身の中に目的を有つて居ない、己自身に依つて己自身を說明せない、他の爲の說明である。力學といふ一體系に於て卽ち純粹物理學の世界に於ては、物力はそれ自身の中に必然性を有し、それ自身の中に目的を有し、それ自身に依つて立つ一つの連續であらうが、知覺的經驗の事實の說明としては單なる假定に過ぎない。力が量的に分つことができると云ふことと自身が既にその內面的統一のないといふことを意味して居る、生きたもの、心あるものは分つことはできぬ。ライプニッツが延長について云つたことは物力についても云ふことができる。直接なる知覺的經驗はそれ自身に於て連續的なるものであるが我々は之を思

惟體系の中に入れようとする時、ポアンカレのいふ如く A=B,B=C,A<C といふ形に於て非連續となる、之を匡正するため物理學的力とか實在とかいふものが考へられるのである。併し知覺的經驗がそのアプリオリを異にする思惟の體系に入つてその獨立性を失ふと共に、所謂物理的世界も他の爲の說明として他に依つて實在性を有するが故にそれ自身に於て完全なるものではない。

二

余は前節に於て、飽和度に於て異なる或一種の色の系列が一連續體となつた時、それが一つの精神作用と考へられねばならぬと論じた。今此等の作用の結合に就て考へて見よう。色覺の性質は三次元的と考へられる、卽ち色覺は色調の外に Farbengrad と Farbenhelligkeit とを有つて居ると考へられる。一つの色は三次元的連續に於て考へられねばならぬ。飽和度の系列に於て連續的と考へられた二つの色は色調の推移に於ても連續的と考へられねばならぬ。此の如き二樣の連續は如何なる關係を有つであらうか。色が Farbenkreis の方向に於て一つの連續と考へられる時、此の如き連續の Ordnungstypus となるものは何物であるであらうか。飽和度の連續に

於て一種の色の性質がその Typus と考へらるゝに對し、色調の連續に於ては色の一般的性質即ち色自體といふ如きものをその Ordnungstypus と考へることができる。而して一々の色調が飽和度の方向に於て、或は光度の方向に於て、無限の連續を形成し得ると考へることができるから、色調の連續は Ordnungstypen の連續と考へることができ、色自體は Typus の Typus と云ふことができるであらう。勿論その孰を一般的とし孰を特殊的とするか、孰を主とし孰を從とするかは、立場によるのであるが、兎に角我々の感覺界とは Ordnungstypen の結合の世界である。所謂性質的なるものゝ相互に關係する世界である、卽ち表象自身が實在たる Aktualität の世界である。向に飽和度に於て、無限に異なる或一種の色の系列がその極限に於て一つの連續となつた時、一つの精神作用となると云つたが、之と同樣に Farbenkreis に於て色調の連續も Ordnungstypen の結合として所謂色覺作用と名けらるゝ一つの精神作用となるのである。唯前者の場合ではその Typus が ähnlich であつたが後者の場合に於ては Typus が、unähnlich と考へられるのである。或は異なれる Typen の連續といふとは考へ得るものでないといふでもあらう。併し種々なる色調は色覺として他の感覺と區別せらるゝだけの共通性を有し、此統一性に於て一つの連續を考へること

ができる、色調一般ともいふべき Typus に於て一つの Ordnung を考へ得るのである。嚴密に考へれば所謂飽和度といふ如きものも決して純なる量的區別ではない、やはり一種の質的區別である。余は飽和度の場合に於て連續と云つたと同様の理由によつて、Farbenkreis の場合に於ても連續と云ふことができると思ふ。

勿論我々の感覺的意識が無限の連續であると云ふ如き考に對しては、種々の理由から反對が起るであらう。心理學者は感覺の性質は互に disparat であり且つ種類に於いても有限であると考へて居る。併し此の如き考は意識の内容に就いて考へて居るので、意識作用に就いて考へて居るのではない。感覺的經驗が全然受働的であつて、それ自身に何等の創造性をも有せないと考へない以上は、斯く云ふことはできぬ。或は作用として考へても、時間空間の上に於て又能力の上に於て有限にして非連續的であると云ふでもあらう。我々の感覺は時間空間の上に於て有限であるのみならず、ウェーバーの法則によつて明なる如く least perceptible difference 以下を意識することはできない、而も我々はその間に無限なる意識的區別の可能を考へ得るのである。併し此の如き反對も我々の感覺界とか知覺界とかいふものを、之と異なつたアプリオリの上に立つ思惟對象界から見て起る考であらう。作用としての意識

は縦令感覺の如きものであつても、空間時間によつて限定することはできない、意識成立の根柢には超時空的或物がある。least perceptible difference といふのは或一つの意識から他の意識に移り行くに當り、若干の距離に於て前の意識との差異を意識するに必要なる刺戟量の最小限度を指すに過ぎない。ヴントの云ふ如くヴェーバーの法則は統覺作用の量を示すものである。ポァンカレの $A=B, B=C, A<C$ といふ如き矛盾は知覺界と思惟界との交渉より起るのである。突然光が強くなつたとか、色が變じたといふ如き場合でも、それは内容の變化であつて、作用其物の連續が失はれたのではない、contrastの場合に於ての様に却つて一種の統一を明にするのである。物體現象に於ての如く統一が内在的でないものにあつては、内容の變化は直に力の不連續と考へられるでもあらうが、對立を成立せしむる統一其物が内在的なる精神現象に於ては、内容の對立は作用の不統一を意味するのではない、識別は却て作用の連續を示すものである。作用其物から離されて見た、單に對象化された線は嚴密なる意味に於て連續といふことができぬであらう、唯一々の點がコーヘンの所謂 der erzeugende Punkt と見做されることに依つて一つの連續線が意識せられるのである。之と同じく色でも光でもその一々がそれ自身の内に種々の傾向を藏する具體

作用として意識された時、即ち我々が純粋知覺のアプリオリの上に立つ時、知覺的經驗は in suo genere infinitum としてそれ自身の中に統一を有する無限の連續となる。Conrad Fiedler は次の如く云つて居る Solange wir uns nur sehend verhalten, kann uns die Welt nur endlich, niemals unendlich erscheinen. Und dennoch giebt es eine Unendlichkeit, die nichts mit dem Gebiet des Denkens zu tun hat, die sich lediglich als eine Unendlichkeil der sichtbaren Welt offenbart. Vor dieser Unendlichkeit steht nur der Künstler und wer ihm zu folgen vermag. Sie eröffnet sich nur da, wo in der Wahrnehmung des Auges jenes Streben seinen Ursprung nimmt, die empfangenen Vorstellungen zu immer höherer Klarheit und Bestimmtheit emporzubilden. (C. Fiedlers Schriften über Kunst.S.309)。それ自身の上に立つ original なものゝみ眞に無限である。ライプニッツは Nouveau Essais. Chap. XVII に於て無限を論じて Mais à l'égard des qualités originales ou connaissables distinctement, on voit qu'il y a quelquefois moyen d'aller à l'infini と云つて居る。氏に從へば眞の無限はすべての結合に先ち、部分の結合に依つて作られないものである。思惟によれる色の判斷は要するに此の如き直覺的意識が基となるのである。以上述べたところと正反對の見方にて我々の意識現象は全然性質的であつてその一々が分つことのできない單一であると云ふ理由から、意識の無限

連續といふに反對する人もあるであらうが、かゝる考も意識を反省して見た抽象的見方から起る考へに過ぎない、具體的意識はそれ自身に於て動的なる無限の進行である。

以上述たべ如き種々の反對は尙十分に顧慮すべき必要があるであらうが、此等の議論に入込むのは今余の目的ではない。余は寧ろ積極的に余の考を述べて見たいと思ふ。Ludwig Coellen, Die neue Malerei. zweite Auflage. によれば、近代の印象派は從來の藝術が現在の知覺と過去の記憶との結合に依つて形式された固定せる物を畫くのに反して、瞬間の印象を現さうと務めた。之は從來の主觀主義に對する反抗であつて新なる objectivistisches Lebensgefühl の結果である。Courbet から Monet, Liebermann に至るまで、新なる Technik によつて此客觀主義を遂行しようとしたのである。而してこの新藝術は das die Bildeinheit schaffende Medium として光を用ゐた。すべての物は光の中に溶され、物は唯特殊なる性質の Lichtmasse としてのみ存在を有して居る。此世界には記憶や思惟の入込む餘地はない。van Gogh に至つて此の如き objectivistisch-pantheistische Anschauungsweise を一層徹底して印象派の人々の表はした自然の Oberflächenzusammenhang をば更に lebendigen Kräftezusammenhang にまで深めた。Gogh

に於ては空間は一つの dynamischer Organismus となり普通の個物は此中にその存在を失つてしまつた、萬物は Kräftesymbolik となつて居るのである。若し現代の新繪畫が右の如き意義を有するものとするならば、現代の新藝術は思惟の混淆を離れて、純粹知覺の世界を對象とすると云ふことができるであらう。そこにフィードレルの云ふ如き思惟の無限と異なつた無限の世界の展望が開かれる。我々は思惟の作用其物に純一なることに依つて、無限數の世界を理解する如く、フィードレルの所謂 vorstellendes Bewusstsein の連續たる藝術家の造形作用 Gestaltungstätigkeit に純一なることに依つて、藝術的無限の世界が開かれるのである。我々の知覺を有限にして非連續的と見るのは思惟の立場に立つて知覺の世界を見るによるのである、己自身の Ordnung の上に立たないものは有限である、死物である。

併し余は是に於て右に云つた如き藝術家の對象界と、マイノングの對象論に於て論ずる如き單に對象間の關係といふ如きものとを區別せなければならぬ。等しく自然科學的存在の立場を離れ、經驗內容其物に基く對象界ではあるが、マイノングが幾何學的關係に比する色其物の關係と、藝術家が無限の連續として見る純粹視覺の對象界とは同一物ではない。そこには恰も數學的眞理と物理學的眞理との間に於

ける如き區別がなければならぬ。後者は或意味に於ける前者の結合である。繪畫や音樂は色や音の非人格的なる一般的關係を現すものでなくして、此等の結合に依て或意味を現すものである。然らば此意味とは如何なるものであるか。言ふ迄もなくそれは概念的の意味ではない。藝術の目的を自然の模倣と考へたり、敎化の手段と考へなどするのは、皆誤れる考に基くのである。新藝術の意義は向に Coellen の語を引いた如く、嚴密に概念的主觀の混淆を去つて、純なる客觀の中に沒頭することである、pantheistisch となることである。併し藝術に於て客觀に純一となると云ふのは所謂自然的客觀に純一となるといふのではない。近代の藝術が自然派から印象派に、印象派から後期印象派に轉ぜなければならなかつたのは、之に依るのである。浪漫的藝術に於ては物の外殼を破つて、その根柢に於ける無限の直觀に到達するのである、自然の pantheistisch gefasste Einheit から客觀的宇宙精神の統一に達するのである。Coellen によれば此の如き傾向の先驅をなしたものは F. Hodler であるといふ。印象派は物を單に Lichteinheit des Bildraumes としたが、ホッドレルは物を bewusste Einheit として見た、物の精神的意義を見た、物を象徵として見た。併し既に van Gogh に於て見られる如く印象主義其物を徹底して浪漫主義に到達したものは Gauguin と Matisse

とである。二人共に van Gogh の用ゐた dynamische Farbe に Melodie の力を與へた、卽ち van Gogh の dynamischer Organismus から純粹な Lyrismus に轉じた、眞に能く自然其物に卽して自然を精神化したのである。彼等は物の本質を直接の感情に求めたのであるが、而も單なる感情に求めたのではなくして、感情の生起する lebendige Aktivität に求めたのである。此の如き動機から Picasso などの Kubismus も生じたのであると云ふ。是に於て客觀的純化の方向に進んだ、新しい藝術は、その徹底する所に於て、却つて主觀的なる或物に到達したと考へることができる。併しその主觀的或物といふのは概念的主觀ではない、直觀其物の中に見出さるゝ主觀である。

藝術は個性を現すとは能く人の云ふ所である。此處に藝術の生命がある、個性を離れて藝術はない。併し個性とは如何なるものであるか。個體或は個物とは世界に於て一あつて二なきものでなければならぬ、卽ち一つの體系に於て唯一の地位を占めるものでなければならぬ。併し或一體系の唯一の地位といふだけでは一個體といふことはできぬ、それ自身に獨立なる一個體は自己の中に他と區別せらるべき無限の關係を含んで居なければならぬ。ライプニッツがモナッドの中に全世界との關係を含むと考へたのも之に依るのである。單に同質的と考へられる物質の原子の

如きも、それ自身に同一なるものとして一つの個體と考へられるには、それ自身の歴史を有たねばならぬ。少くとも時間空間の關係に於て他のすべてと區別せらるべき無限の關係を有すると考へられねばならぬ。特殊なればなる程全體と關係に於て立たねばならぬ、卽ち harmonie préétablie の上に立たねばならぬ。ライプニッツの如く眞理に於ては述語が主語の中になければならぬ praedicatum inesse subjecto verae propositionis といふ考から出立せば、個體はその中に無限の述語を含んで居らなければならぬ。アダムの個體概念の中にアダムに起るすべての事柄が含まれて居なければならぬ。一般的眞理と云ふのは之に反し主語の中に含まれたる內容が有限であると考へることができる。一般的なるだけそれだけ有限である。その內容が有限より無限の極に達する時、la notion spécifique から la notion individuelle に入る。此處に vérités éternelles と vérités de fait との區別がある。而して此推移は數學の極限概念に於ての如く、單なる程度の區別ではなくして、性質的區別でなければならぬ、卽ち立場の飛躍がなければならぬ、認識の對象を內容から作用の方に移さねばならぬ、Ordnungstypus が實在的とならねばならぬ、カントルの Ordnungstypus θ に於ての樣にすべての點が極限點とならねばならぬ、個體は作用の連續である。一般的眞理の命題

に於てはその主語が或限定せられたアプリオリと考へられるが、verites contingentes に於てはその主語たるものはアプリオリと考へねばならぬ。而して此の如きアプリオリのアプリオリの統一は意志である、ライブニッツが可能的世界 les mondes possiblesの根柢に神の自由意志 décrets libres がある、と云つた如く、偶然的眞理の根柢に意志があるのである。個體は意志の內面的統一である。斯くしてはじめて chacune de ces substance contient dans sa nature legem continuationis seriei suarum operationum et tout ce qui lui est arrivé et arrivera と云ふことができるのである。或一つの要素が個體として己自身の中に全體の意味卽ち全體と關係を藏するにはコーエンの der erzeugende Punkt の考に於ての如く動的とならねばならぬ、特殊の中に一般を含む個體は一つの發展的作用でなければならぬ、特殊なる要素は全體の象徵とならなければならぬ。物理的世界に於ても、ライブニッツがデカートに反對した如く、實在は靜的でなくして動的でなければならぬ、物體の本質は extension にあるのではなくして、activity にあると云ふことができる。併し右の如き意味に於て眞に部分の中に全體を含む個體はライブニッツのモナッドの様に精神的のものでなければならぬ。それ自身の中に內面的統一の理解を有せない、隱れた或物に依つて統一せられた物體現象

は他に依つて立つものであつて、眞に部分の中に全體を藏し、それ自身に依つて立つ個體とは云はれない。斯くして眞に個體的なるものは精神的でなければならぬ。個體の知識がcontingentと考へられるのは、要するに意志は認識對象とすることはできぬ、卽ち反省することはできぬと云ふことに歸するのである。個體の達すべからざる奥底は此處にあるのである。多くの人は物體現象を偶然的と考へられるのであるが、物體現象を構成する種々の性質はそれぞれの立場に於て必然的であつて、偶然性は此等の內容の結合にあるのである、卽ち結合の不可知的なる所に物體現象の偶然性があるのである。併し斯く物體現象の背後に考へられる統一は既に對象化せられたもの、認識對象の世界に屬するものとして却つて必然性を有すると考へなければならぬ。物理的には嚴密なる意味に於てthisnessといふとはない。ライプニッツが可能的世界の背後に神の自由意志があると考へた如く、我々の直接經驗の統一がvérités contingentesの基となる、而して此統一の本質は卽ち意志である。事實的眞理が理性以上の確實性を有すると考へられるのは之に依るのである。意志が主觀的と考へられ、隨意的と考へられるのは、對象化せられた個人的意志を考へる故である。眞に創造的なる自由の意志は概念的意識を消磨して純客觀的となつた時、卽ち

主客合一となつた場合に働くのである。此時我々は眞の個性、眞の自己を見ることとができる。此處に我々は概念的知識を超越して動かすことのできない事實的眞理に撞着するのである。我々は之に就いて無限の説明を試みることができるであらう、併し事實的眞理は概念的知識を以て達することのできない極限である。

余は藝術の目的とする眞の個性とは右に述べた如きものであると思ふ。客觀的に純化されて來た新藝術が却つて主觀的或物に到達したと考へられるのも之に依るのである。眞に無關心なる美的感情即ち純粹感情とは此の如き超概念的なる個性の統一に伴ふのである。美的意識の内容とは此の如き個性の内容を表すものである。所謂純粹對象の世界の成立するには、その基たる作用がなければならぬ、作用とはアプリオリ自身が實在となつたものである、其具體的狀態である。我々が或一種の色を無限の連續として意識する時、之を意識内容として意識するのではない、作用として意識するのである、Ordnungstypus として意識するのである。色が種々なる方向の推移に於て無限なる一連續と考へられる時、色といふ一つの性質的一般者がそれ自身に於て獨立し、一作用となるのである。藝術家の純粹視覺 reines Sehen とは之をいふのである。之と同樣に音も一つの連續的體系として、純粹聽覺といふもの

を考へることができる。 心理學に於て視覺作用又は聽覺作用といふのは、此の如き純粹視覺又は聽覺の、認識對象即ち自然界に投げられた射影である。 併し我々の具體的經驗は單なる視覺や單なる聽覺ではない、我々の具體的經驗は無限なる作用の連續である。 而して此の如き無限なる作用の統一が我々の人格である。 我々の人格とは此の如き作用の無限なる系列の極限である。 藝術家の對象となる個性といふのは、此の如き人格的統一の無限なる典型の一である。 例へば此處に一枚の畫があつて、眞に能く個性を現して居るといふことは、此畫が大なる人性の唯一なる一典型を現して居るといふことである。 眞の個性といふのは大なる人格を離れることではない、大なる人格の中に於て唯一の位置を見出すことである、主觀的となることではない、客觀の中に自己を沒することである。 而して斯く大なる人格の中に於て唯一の位置を占めるといふには、前に個體の場合に於て云つた樣に、一點中に他の凡てと無限の關係を含んで居なければならぬ。 併し斯く一點の中に他との無限の關係を含むといふことは如何なることを意味して居るか、己の中に他を含むには己自身を超越しなければならぬ。 印象派が從來の藝術に反して萬物を光の中に溶かし、物を Lichteinheit として見たと云ふも、印象派の目的は單に一般的なる色や光の關係を

現さうとしたのでないことは言ふまでもない。畫家の寫し出さうとするのは一種の實在である。併し此實在は我々の認識對象となる所謂概念的實在ではない、未だ概念的加工の加はらない、或は概念に現すことのできない直覺的實在である。而して我々の眞の個性は認識對象の世界に現れるのではなくして、此の如く概念的主觀を滅した所に現れるのである、概念的世界を超越した所に現れるのである。而して單純なる色とか光とかの世界が斯く超概念的實在を現し、人格的統一の世界、卽ち絕對意志の對象界に於て、無限の意味を含むことに依つて、唯一の個性を現し得るのは、色や光の作用卽ち視覺作用が作用自身の立場を超越することに依つて可能なるのである。色が無限なる連續の極限に於て作用となり、作用はその無限なる連續の極限に於て一つの人格となる、卽ち絕對意志の作用となる。而して連續に於てはすべての點に於て全體の意味を含む如く、一種の純粹意識も連續の一點として、その中に全人格的意義を含み得るのである、卽ち純粹視覺の Gestaltungstätigkeit に於ては、一種の作用に基く經驗の中に全體の意味を寓することができるのである。純粹視覺が自ら行爲を伴ふと考へられるのは、認識對象界を超越して靈肉一如の象徵界に入るが爲である。

余は尙個體と個性との區別に就いて一言して置かなければならぬ。個體とはライプニッツが「アルノー」との論爭に於て、アダムの概念に就いて云つた樣に、豫定調和によつてその中に他のすべてとの關係を含み、此世界に於て一あつて二なきものを云ふのであるが、個性とは藝術の作品に於て見る如く、それ自身に於て生きたものでなければならぬ、生命を有つたものでなければならぬ、卽ち獨立の價値を有するものである。個性には時間空間上の唯一性は必ずしも必要ではない、個性を有し得るものは自由意志を有つたものでなければならぬ、單に因襲に從つて衣架飯嚢たるものではなくして、創造的なる或物を有つたものでなければならぬ。創造的といふことは超認識界に於て卽ち情意の世界に於て、一あつて二なき特色を有することである。純理論的なる學問の如きものでも、或民族又は個人の個性を帶びると考へられるのは、此意味に於てでなければならぬ。畫や彫刻に於て個性といふのは此の如き意味の個性である。（未完）